



写真-1 津門中央公園の西を流れる東川（平成31年4月撮影）

■ 「灘の酒」の良質な味を支える宮水

写真-1 は、灘五郷の一つ「西宮郷」の東を流れる東川を撮ったもので、左に見えるのは某酒造メーカーの日本酒の貯蔵タンクです。東川の左岸側（東側）は「今津郷」です。

灘五郷は、灘一帯にある五つの酒造地（東から今津郷・西宮郷・魚崎郷・御影郷・西郷）の総称で、日本酒の生産量が最も多い地域です。令和2（2020）年時点での国内生産量の約25%を占めていますが、その灘の酒の良質な味を支えている要因の一つが、ミネラルを多く含んだ硬水で「名水百選」にも選ばれた「宮水」です。宮水は、西宮市南部の久保町、鞍掛町、石在町（いしざいちょう）および東町にわたる約400m四方の地域（宮水地帯）にあり、多くの酒造会社が浅井戸から汲み上げて酒造用水として使用しています。一般利用はできません。

■ 日本三大酒処の一つ「灘」

灘は、京都・伏見、広島・西条とともにわが国を代表する日本三大酒処の一つとされています。灘と伏見は、日本酒の生産量からいって文句なしですが、それほど多くない西条は意外です。これら3ヶ所が選定されたのは、酒造りで重要視されている「水」にあるようです。

兵庫県は日本酒の生産量トップを誇る酒処ですが、兵庫県の日本酒を語る上で欠かせないのが宮水です。硬水で仕込んだ日本酒は発酵が旺盛に進み、濃醇でありながら辛口な味わいに仕上がるそうです。

兵庫県に次ぐ日本酒生産量を誇るのが京都ですが、その中でも生産量の多い伏見の日本酒は、「伏見の御香水」という名水がポイントです。御香水は適度にミネラル分を含む中硬水で、やわらかな味わいの日本酒を生み出すそうです。

灘と伏見の日本酒は、水質の違いから、力強い「灘の男酒」、繊細な「伏見の女酒」と呼ばれることも。

都道府県別生産量トップ 5 に入っていない広島県の西条が日本三大酒処の一つと呼ばれるのは、やはり良質な水が採取できることが理由です。

西条の水は、ミネラル分の含有量が少ない軟水で日本酒造りに適さないとされていましたが、明治時代に三浦仙三郎によって開発された「軟水醸造法」により醸造された日本酒は、透明感のある爽快な味わいに仕上がるとか。美味しい日本酒造りには、良質な「水」が欠かせないようです。



写真-2 伏見十石船の向うに月桂冠大倉記念館



写真-3 西条・酒蔵通り「歴史庭園」

■ 灘五郷を日本一の酒処にした要因は？

菊正宗酒造記念館では、灘五郷を日本一の酒処にした 6 項目の要因が以下のように掲示されていました。

- ① 「米」：近隣に播州米・備前米を中心とする酒造りに適した大粒の米の産地があり、米の取引の多く行われた堺・浪花にも近く、良い米が入手しやすかった。
- ② 「水」：太古より六甲山から流れ出る伏流水は、ミネラルを多く含み、鉄分の含有の少ない酒造りに非常に適した水であった。
- ③ 「技」：灘地方に比較的近い丹波・但馬地方には古くから酒造りの技術が伝えられ、この人たちが農閑期の出稼ぎとして灘に働きに出た（丹波杜氏・但馬杜氏）。
- ④ 「川」：六甲山から流れ出た川は、傾斜のある流れのまま海へ注ぐため、水車による産業が盛んだった。酒米の精米に水車を利用したことが灘酒の大量生産につながる。
- ⑤ 「風」：六甲風（おろし）と呼ばれる季節風は、決まった時期に決まった方角から吹く乾燥した風であることから、窓の開閉だけで酒蔵の温度・湿度の管理ができる。
- ⑥ 「港」：江戸時代、大消費地江戸に向かって酒は船で運ばれていた。それまで江戸送りの酒の中心は内陸にある伏見や伊丹であった。海に面した灘地方は、酒荷を積み替える必要がなく優位に展開した。

上記 6 項目の要因のうち、今も有利に働いているのは「水」と「米」だけです。その意味で「宮水」の保全は大事です。今回は、その「水」についてまとめてみようと思います。

■ 灘五郷の酒造りの歴史

江戸幕府は、年貢としてできるだけ多くの米を徴収するため、当初、酒造りを抑えていましたが、新田開発や農業技術の向上で米の収穫量が増えて米価が下がると、米の消費を勧めて米価を引上げ、同時に酒造家からの営業税をも期待するようになります。寛永 19（1642）年、街道沿いの都市での酒造りを認め、やがて収穫直後の米価引上げのために冬季の酒造りを奨励します。

こうしたことを背景に 17 世紀後半には、尼崎・西宮・兵庫などの町で酒造業が発展していきます。殊に良質の米と地下水、新しい製法と丹波杜氏の技術に支えられて、「丹醸」と称された伊丹や池田が酒処として著名でした。18 世紀の初めに江戸が百万の人口を擁する大消費地となると様々な物資が江戸に送られるようになります。こうなると海運の便が重要となり、18 世紀の前半には灘地方から江戸に送られる酒の記録が少しずつ出現し始めます。

灘地方における酒造りの歴史は、西宮での醸造が最初とされていますが、伝承的にはさらに古く元弘・建武の昔(1330 年頃)より行われていたようで、室町時代にはすでに酒造りが始まっていたとの記録があります。

その後、江戸時代前期の寛永年間（1624～1644 年）に伊丹の雑喉屋（ざこや）文右衛門が西宮に移住して酒造りを始めます。以後、多くの酒造家が追従、流通面の優位性から灘地方の酒造業が発展していくことになります。灘地方では明暦年間（1655～1658 年）から享保年間（1716～1736 年）にかけての 80 年あまりの間に、今日につながる酒造家が多く創業しており、この時期が勃興期とみられています。

伊丹の技術を導入した西宮の酒造りが急成長し、宝暦 4（1754）年に幕府が酒の勝手造りを認めると、灘の酒造りは本格化していきます。天下の台所・大坂の近くで早くから貨幣経済が浸透していたこと、良質の米と水車精米による酒米の大量生産、丹波杜氏の技術に加えて海運の便、さらに海辺の埋め立て地が酒蔵用地となったことなどが灘の酒造業発展の背景にあります。

記録によると、天明 5（1785）年には江戸に荷上げされた酒の中で、灘酒は 4 割を超え、文化 14（1817）年には 5 割を超えます。天保 11（1840）年に宮水が発見されたことで旨さを増した灘酒は、幕末には 6 割を占めるまでになっています。こうして明治の初めには灘酒の名声は確固たるものとなっていきました。

明治 19（1886）年に摂津灘酒造組合が結成された際に、東方の西宮や今津の酒造家もこれに加わります。この時、江戸時代の下灘組と上灘西組を西郷、上灘中組を中郷、上灘東組を東郷と称し、西宮郷と今津郷を加えて、新たに灘五郷と称するようになりました。

■ 酒造りに最適な宮水の発見

宮水が酒造用水として優れて比類ないものと知られるようになったのは、天保 8（1837）年、雀部（ささべ）市郎右衛門が西宮で「鱗井戸」を発見したときに始まるといわれています。

ただ、酒造りに最適な宮水として価値付けたのは、天保 11（1840）年に宮水発祥の地として知られる梅の木井戸を発見した魚崎の櫻正宗六代目蔵元・山邑太左衛門（やまむらたさえもん）です。

太左衛門は西宮と魚崎（現・神戸市東灘区）に酒蔵を持っていましたが、双方で造る酒は他の工程をすべて同じにしても味が異なり、西宮の水で造る酒の良質な味の原因を『同地にある梅ノ木蔵の「梅ノ木井戸」の水にある』と結論付け、これをもって「宮水の発見」としています。当初、「西宮の水」と呼んでいましたが、やがて略されて「宮水」と呼ばれるようになりました。現在、梅の木井戸のある場所には、写真-4 のような「宮水発祥之地」と刻まれた石碑が建てられています。

宮水が発見される前後の時代、日本酒は「秋落ち」といって、夏が過ぎ秋が来る頃には味が落ちたといわれていましたが、宮水で造った酒は「秋晴れ」と呼ばれ、秋が来る頃からかえって味が冴え、珍重されたといわれています（下戸の筆者にはチンプンカンプンですが）。

宮水地帯には約 30 の井戸場が散在し、一つの井戸場には数本の井戸が掘られ、宮水井戸の総数は約 80 本になるとか。下の写真-4～7 は、宮水井戸のほんの一部です。



写真-4 「宮水発祥之地」の石碑



写真-5 「宮水庭園」敷地内には大閼・白鹿・白鷹の宮水井戸がある。



写真-6 「宮水庭園」内にある「白鹿宮水井」



写真-7 国道 43 号沿いにある沢の鶴の宮水井戸

■ 宮水の由来・特徴

宮水は、「戎伏流」、「札幌筋伏流」、「法安寺伏流」の三つの伏流水が西宮市役所の南 650m 付近、いわゆる「宮水地帯」で合流しています。

夙川を起源とする「戎伏流」は酸素を多く含み、水中の鉄分を酸化鉄として沈殿させて除去し、かつて海であった地域を流れる「札幌筋伏流」、「法安寺伏流」は、酒の発酵を助けるカリウム、リンなどを多く含みます。これらの伏流水が合流しブレンドされることで酵母の養分となるミネラルが豊富で鉄分が少なく酒造りには理想的な水「宮水」となります。



図-1 宮水地帯周辺の地図

宮水の水質の特徴は、塩素・硝酸・リンを比較的多量に含有し、鉄・アンモニアをほとんど含有せず、硬度は8前後です。また、窒素は硝酸性となり、帯水層が褐色を帯びた砂層で鉄分が沈殿していることからわかるように、酸化状態の地下水です。

「宮水保存調査会」の委員だった済川要(すみがわかなめ)氏(故人)によると、宮水は地表下4~5mから湧出する地下水で、この付近の地表下約6m以浅に分布する花崗岩の細~中礫を含む粗粒砂主体の砂層を帯水層としています。その下位には一般に、沖積粘土層あるいは海浜成の貝殻混じりの砂層が分布しています。

本地帯の北部はかつて入り海であったと想定されていて、海に分布する沖積粘土層の上面標高分布からも、西宮神社の東から南東に伸びる谷地形が読み取れ、地形的にも夙川の山麓扇状地の一部であることがわかります。つまり宮水の帯水層は、夙川から供給された扇状地堆積物から構成され、夙川を主とする伏流水によって涵養されているのです。しかし、夙川の水質は希薄な軟水であり、宮水の成分とは違ったものであることから、この帯水層を通過することによってその特徴的な水質を獲得するものと考えられています。

■ 兵庫県南部地震でも宮水は枯れず

平成7(1995)年1月17日に発生した兵庫県南部地震で灘五郷の酒造業は大きなダメージを受け、白壁土蔵造りの酒蔵、赤煉瓦の酒蔵などが倒壊してしまいました。

倒壊した蔵を見た蔵人たちは宮水井戸に駆けつけ、枯れずに水を湛える井戸を見て、「また酒を造ることができる」と涙を流したそうです。

また、断水により水を求める人たちに、普段開放されていない宮水井戸を生活用水として一般開放しました(右の写真-8)。

写真-5は宮水庭園です。阪神・淡路大震災の前は、大関・白鹿・白鷹の宮水井戸が独立してありましたが、震災後お互いの垣根を取っ払って一つの庭園として整備しています。



写真-8 一般開放された宮水井戸
(「西宮市政ニュース1519号」から引用)

■ モノローグ

宮水地帯で合流する三つの伏流水の名称の由来について、戎伏流は、えびす神社の総本社である西宮神社付近を流れていることからこの名称が付いていて、札場筋伏流も、阪神電鉄・西宮駅の下を南北に通る札場筋に由来しています。では、法安寺伏流の法安寺という寺はどこにあるのでしょうか。かなり以前から気になっていて、今回「宮水」をテーマにしたことを機にネットで根気よく検索していると見つかりました。

法安寺は、西宮市末広町(図-1の地図参照:阪急電鉄神戸線の南、国道171号の西)にある浄土宗の寺院でした。しかし、この位置であれば札場筋伏流と同方向になってしまいます(図-2参照)。

現在の法安寺は近代的な建物に建て替えられていることから、元の法安寺は別の所にあったのでは、という推理の下、さらに調べてみると、西宮市佛教会のホームページに次のような記述を見つけました。「法安寺は戦災で焼失するまで石在町にあり、宮水にも法安寺伏流として名を残しています」。

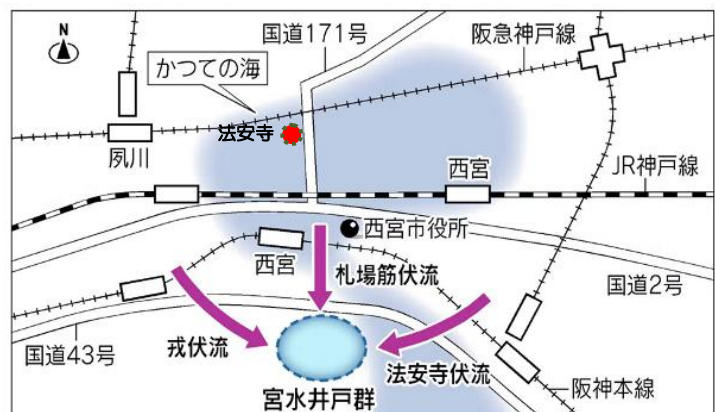


図-2 宮水地帯に流れ込む3つの伏流水
日本経済新聞(平成26年3月16日)から引用・加工

旧来の宮水地帯は、現在の宮水地帯より南の方だったので、これなら納得できそうです。

キキョウ（桔梗）

キキョウ科キキョウ属の多年生草本植物。根は太く黄白色。草丈は50～100cm程度。葉は一般には互生で先は尖っており縁に鋸歯がある。秋の季語であり、また秋の七草の一つであるが、実際の開花時期は6月中旬の梅雨頃から初秋の9月頃までである。キキョウの根はサポニン（オレアナン型トリテルペンサポニン）を多く含むことから生薬として利用されている。「万葉集」で、山上憶良が詠んだ歌（巻八 1538）「萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 姫部志 また藤袴 朝貌の花」のうちの「朝貌の花」は本種を指す。



写真-9 酒蔵通りの花壇に咲いていたキキョウ

【参考資料】

- 1 『宮水（みやみず）』 環境省選定 名水百選 HP（昭和60年選定）
<https://water-pub.env.go.jp/water-pub/mizu-site/meisui/data/index.asp?info=57>
- 2 『日本三大酒処とは』 美味しいお酒研究所 HP
<https://www.shiawasewine-c.com/apps/note/55804#i-2>
- 3 『灘五郷：歴史』 灘五郷酒造組合 HP
<https://www.nadagogo.ne.jp/history/>
- 4 『東灘歴史散歩』 田辺真人 平成10年6月
- 5 『兵庫史を歩く～完結編』 NHK 神戸放送局 姫路支局編 平成4年7月
- 6 『武庫川市民学会誌 Vol.3 No.2～宮水の研究者、済川要（スミカワ研究所）』 飯塚修三 平成27年
- 7 『兵庫の地質～兵庫県地質図解説書・土地地質編』 兵庫県土地地質図編纂委員会 平成9年8月再版
- 8 『西宮ベディア～宮水と酒文化』 西宮流 HP 令和4年7月
<https://nishinomiya-style.jp/glossary/miyamizu-to-sakebunka>
- 9 『西宮市政ニュース 1519号』 西宮市政策局市長室広報課編 平成30年1月
- 10 『大社地区～法安寺』 西宮市佛教会 HP
http://nba-japan.info/member_ts.html
- 11 『灘五郷、宮水、キキョウ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和7（2025）年1月 『ひょうご水百景』 No.213

改訂：令和8（2026）年8月 『ひょうご水百景』 No.213